

Oshima
Letter

大島レター

10

March
2021





表紙のお話

表紙は、大島の夏祭りのときの、花火の
写真です。夏祭りには、たくさんの人が
集まって、とてもにぎやかで驚きまし
た。さまざまな食べ物や飲み物の出店
や、催し物で楽しみ、海のむこうの男木
島に日が沈むころ、四国各地の踊りで盛
りあがります。あたりが暗くなったこ
ろ、大島港の栈橋から、打ち上げ花火が
あがります。距離が近いためか、音が大き
きく、間近に見えて、大迫力です。花火
が開いて大輪の花を咲かせた直後、火が
夜空にすっと消えていくのを見ると、夏
祭りがにぎやかなぶん、少し、寂しい気
がします。大切な人に会えない寂しい
日々は、もうしばらく続きそうです。が、
いつか、大島で再会し、夏祭りで花火が
打ちあがるのを、みんなで見たいです。

(写真・文：白神基広)





目次

〈寄稿文〉

長島愛生園歴史館から大島青松園を見る

長島愛生園歴史館 主任学芸員 田村朋久

3

〈最近の活動報告〉

手作りラジオ番組「大島アワー」毎月放送中！

6

〈連載コーナー〉

瀬戸内放送局 今月の「大島アワー」

8

〈年表〉

瀬戸内国際芸術祭と大島のできごと

9

編集後記

長島愛生園 歴史館から 大島青松園を 見る

長島愛生園歴史館
主任学芸員 田村朋久

小豆島を挟んで瀬戸内海の対岸。岡山県瀬戸内市の長島には長島愛生園と邑久光明園があります。かねてより、大島青松園、長島愛生園、邑久光明園は全国のハンセン病療養所の中では「瀬戸内三園」と称され、職員と入所者、それぞれの交流が盛んに行われてきました。療養所の成り立ち自体はそれぞれの特色がありますが、同じ瀬戸内海を望む景観を有し、入所者の様々な思いが刻まれた場所であることは変わりません。



私が勤務する長島愛生園歴史館は平成15年に、歴史的建造物である事務本館を改修して博物館として開館しました。現在までの来館者数は16万人を超え、ここ数年は毎年増加傾向にあります。立地的には33年前に橋が架けられ、本土と陸続きとは言え、最寄り駅から20キロメートル、さらに周辺に大都市も無いことから不便な場所であると言えます。それにもかかわらず、なぜこうした不便な場所に、なぜこれだけ多くの人々が訪れてくださるのでしょうか。

長島愛生園歴史館の目的は、「ハンセン病問題を伝え、入所者の名誉回復を図るとともに、二度と同じような人権侵害事例を起こさない」というものです。そのために様々な資料や動画、歴史的建造物や景観を見ていただきながら理解を促します。しかし、見学者数の9割以上が団体での見学であることを考えると、皆がみな高い問題意識

を有しているとは言えません。中には、ハンセン病問題が自らの関心の外側にある場合が多いため、解説文を読んでいただけケースもあります。そこで、当館ではわかりやすい言葉で展示解説を十分に行い、理解を促す、ということを重要視しています。来館者にとっては、ハンセン病の学習自体が、関心を持つことで理解を深め、差別を無くするという「体験」そのものであり、ハンセン病に限らず様々な課題に「関心」を寄せて理解を深めるきっかけとなるよう研修を進めています。その結果、来館団体の6割がリーダーとして訪れてくださっており、毎年の見学者増へと繋がっています。これは、長島愛生園でのハンセン病問題の学びが、市民の皆様にとって有意義なものになっている証と言えます。

現在、市民にとっての学びの場、体験の場として認識されつつある療養所



は、かつてはハンセン病患者の隔離の場であり、今では療養所入所者の生活の場となっています。当然、生活の場である以上、日々の利便性の確保は重要で、ハンセン病の後遺症に対する生活支援の痕跡は至るところに見受けられます。昭和30年代以降は入所者団体の要請もあり、特に平地が少ない島の療養所では建造物のスクラップアンドビルドが繰り返され、古い建造物は姿を消していききました。一方で、都市圏の療養所では高度経済成長以降、かつては過疎地であった療養所の周辺が、大都市のベッドタウンとなり、周囲の景観も大きく変わっていききました。それゆえ、療養所によっては隔離を象徴とする建造物や景観が失われてしまいました。

超高齢化が進むハンセン病療養所では今後数年でその形態が大きく変わっていくことは確実です。今までの主役

であった入所者の皆さんは居なくなり、別の「何か」が主役になるとなります。その「何か」とは将来構想という名前で議論されており、長島愛生園は人権学習の場として残す、すなわち「学習の場」が主役になると言えます。場所を主役として残そうとするならば、その場所を形成している建造物、史跡、そして景観の保全と活用が課題となります。

保存と活用という矛盾する2つの課題を高いレベルで実現しているのが世界文化遺産であるため、私たちはそれを目指し活動しています。その中で、建造物と史跡の保存と活用については、文化庁の担当官、専門知識を有する業者さんなどから助言をいただいております。実現するためには、予算や制度など様々な課題があるため、一朝一夕にはいきませんが、まずは議論を尽くす



ことが重要となります。一方で、瀬戸内の療養所に共通する、海を隔ての壁とする島の景観は、さほど変化していません。つまり隔離を示す景観は維持している、と言えます。

島の歴史を伝える時、海が隔ての壁となった隔離施設らしい景観は、そこで生きた人たちの生活を伝える時にとっても大きな役割を果たします。さらに大島は今なお離島であり、「隔離施設らしさ」は長島のそれよりも強く残されています。

離島という立地は生活の利便性という面ではハンデでしかありませんでした。しかし、ハンセン病の歴史の継承を考えた時、それは大きなアドバンテージだと言えます。地域に根ざした取り組みを行なっている瀬戸内国際芸術祭とともに、このアドバンテージを活かし、より多くの方に島の歴史を伝えていってほしいと思います。

〈最近の活動報告〉

手作りラジオ番組

「大島アワー」

毎月放送中！



多くの入所者がいた時代は、さまざまな同好会やクラブが結成され、活発に活動が行われていました。その中の一つに、入所者と青松園の職員によって昭和50年代後半に結成された「放送劇同好会」があります。「父帰る」(原作 菊池寛)や「大阪の子守唄」(原作 館直志)などの朗読劇を録音し、園内で放送していました。「放送劇同好会」に出演経験のある入所者さんによると「盲人の方から好評だった。」と、聞いたことがあります。

私たちのイベントは、入所者のみなさんが住んでいるエリアから少し離れた

た会場で開催しています。ライブペインティングや映像などの視覚的に楽しむ内容のものもあり、ハンセン病の後遺症で弱視の方や盲人の方が楽しめなかったことが何度かありました。また、入所者のみなさんが高齢になり、会場への移動も難しくなってきました。部屋でくつろぎながら楽しんでもらえるものをお届けしたいと話し合う中で、かつての「放送劇同好会」をヒントに、2015年9月、こえび隊が制作する「大島アワー」(高松市主催)が誕生しました。

これまで放送した大島アワーは全7回。毎月1回園内放送を続けています。約15分間の番組ですが、毎回編集会議で企画を練り、アイデアを出し合い、聞いているみなさんの心が和み、楽しめるような内容を届けようという工夫を凝らしています。ここで、番組内容をいくつか紹介します。

● 今月のお誕生日

1回目の放送から毎月続けているコーナーです。その月に誕生日を迎える入所者さんのお名前を呼び、子どもたちが歌う「ハッピーバースデー」の曲を届けています。お誕生月になると、ご自身の名前が放送されるのを、心待ちにしている入所者さんもいるようです。放送でお名前を紹介するにあたっては、毎月、青松園の各センターの職員さんたちが、お誕生月の方々の意向を確認してくださり、それを福祉室の職員さんが取りまとめ、お知らせいただいています。「今月のお誕生日」のコーナーは、職員さんたちの協力に支えられています。

● 鳥だより

鳥々へ通うこえび隊ならではの楽しいコーナーです。こえび隊が、さまざま



まな島でインタビューをしたり、運動会、祭り、文化祭、伝統行事など島の催しものを録音し、臨場感あるレポートをしています。

●メッセージコーナー



アーティストによる声の近況報告やメッセージ、こえび隊が書いた手紙の朗読です。放送後、入所者さんから「○○さんの声聞いたぞ。」と私たちに報告してくれることもあります。特に今は、アーティストやこえび隊の大島の活動は制限され、入所者さんに会えない日が続いています。みんなの想いが、入所者さんたちに届きますように。

●大島クラブ紹介



ゲートボールクラブやバソコンクラブ、過去結成されていたクラブ活動のお話を、入所者さんとこえび隊が会話

をしながら録音し放送しています。各クラブの成り立ちや活動内容、みなさんがクラブ活動に入ろうと思ったきっかけなどを、楽しいこぼれ話なども交えてお話しいただいています。

●趣味の時間



入所さんが盆栽、カラオケ、写真、畑仕事などの趣味を語るコーナーです。こちらもこえび隊が聞き手となります。ときどき、笑い声も入る楽しい時間です。入所者さんたちの普段の生活の様子や人柄も伝わってきます。録音するときは、みなさんがリラックスし、自然に話せるような雰囲気づくりを心がけています。

●ナレーション



オープニングやエンディング、各コーナーを紹介する進行役は、芸術祭スタッフやこえび隊がかわりばんこで

担当しています。入所さんが聞き取りやすいように、ゆっくりハキハキと、抑揚をつけた明るいナレーションにしています。



たった15分のラジオ番組ですが、毎月いろいろな人たちの協力できています。また、大島アワーをきっかけに、入所者さんたちの声を残せるようになりました。どれも自然体で話す入所者さんたちの心温まるエピソードばかりです。これらは「大島の歴史を残し、伝えたい」という入所者さんたちの願いに結びついていきます。音で届ける「大島アワー」は、大島のみなさんとながらることのできる大切な取り組みとなっています。



〈連載コーナー〉瀬戸内放送局 今月の「大島アワー」



パソコンクラブは、入所者さんたちの「パソコンを使えるようになりたい！」という希望により、平成22年9月から始まりました。当初のメンバーは6人。今は3人となりましたが、月2回の活動を毎回楽しんでいます。活動日は島外からボランティアの先生がやって来ます。パソコン教室の前に、先生たちと入所者さんで茶話会をするのが定番。みなさん、先生たちの近況を聞くのが大好きなんだそうです。今回ご紹介するのは、「大島アワー」の前身となる「ちよつとこま大島」という番組で、クラブ発足5年目にお話を伺って放送した内容です。森和男さんと西野ミエ子さんの掛け合いが楽しいインタビュー。きつと茶話会もこんな感じで盛り上がるんですね。

こえび…どんな活動をしてるんですか？

(お二人ほぼ同時に)

森さん…いろいろ。

西野さん…あちこちに出演しています。

こえび…どんなところに出演しているんですか？

(お二人ほぼ同時に)

森さん…私たちがやっていることを発表したらどうでしょうかってことだね。

西野さん…東京の多摩全生園、ハンセン

病資料館、香川県庁、それから奈良にも行ったね。

西野さん…あ！それから年に2回

レクリエーションもしています。この前は亀鶴公園、秋は小豆島の寒霞溪にも行ったね。

こえび…そこでデジカメで写真を撮ったものを作品として出展しているんですね？

西野さん…そうそうそう、そうよ、そうなんですよ！そして安いごはん食べべ

るのが楽しみ。

森さん…安いごはんじゃなくて、おいしいごはんね。

西野さん…あははー！(笑い)

こえび…パソコンはうまく使えるようになりましたか？

西野さん…まあぼちぼち。おぼえることより忘れることの方が多いわ！



インタビューではこんなことを言っていました。先生たちの丁寧な指導により、入所者さんたちのパソコンスキルは日々アップしているそうです。レクリエーションでは、先生と一緒に出かけし、先生からデジカメの写真講座を受けながら入所者さんたちが写真撮影をしています。2017年にはこえび隊と一緒に直島に行きましたね！



瀬戸内国際芸術祭と 大島のできごと

2004年
～
2013年

※2014年以降は次号につづく



2010
4,812人

	2009	2008	2007	2006	2005	2004
2月			10月			
	やさしい美術プロジェクト主催「かんきつまつり」初開催。以後、毎年開催 P2 瀬戸内国際芸術祭実行委員会主催「大島住民説明会」開催。大島の作品展開の説明が行われた P3	カフェ・シヨルの構想始まる P1	大島青松園入所者自治会 会長森和男さん、芸術祭参加を決める P2 やさしい美術プロジェクト高橋伸行さん、大島初訪問 P1	総合ディレクター北川フラム、大島初訪問	講演会で芸術祭の構想発表	香川県、福武財団それぞれが芸術祭の構想を始める



こえびメモ1

この時から高橋さんは、時間をかけて丁寧に入所者との交流を深め、関係を築いてきました。



こえびメモ4

第1回目の芸術祭は、作品鑑賞パスポートを持っているお客さんだけが大島を訪れることができました。初回ということで条件付きでしたが、これも大島が開いていくための第一歩。



こえびメモ3

以後、毎月開催。自治会、社会交流会館学芸員、アーティスト、高松市、こえび隊が出席し、情報共有や芸術祭に向けてさまざまな意見が交わされた大切な会です。



こえびメモ2

「療養所の将来構想につながるきっかけになれば。」という想いで参加を決められたそうです。



P3
多くの入所者さんと職員さんが参加してくださいました。緊張の説明会！



P2
まだ完成していないカフェ・シヨルで、大島でのこえび初活動



P1
入所者さんに試食してもらい、カフェのメニューを開発していました

瀬戸内国際芸術祭2013

来場者数(大島) 4,544人



瀬戸内国際芸術祭

来場者数(大島)

2013				2012	2011		2010			
12月	7月	3月	1月	9月	10月	9月	7月	4月	3月	
やさしい美術プロジェクトメンバーが運営するカフェ・シヨル、最後を迎える P6	高松市が大島の将来的なビジョンを考える「大島の在り方を考える会」を設置	島の南側の貯水池を訪れるツアーを開催 P5	アート作品の鑑賞が有料に ※モ6	「島間交流」で、大島のみなさんが小豆島を訪問	イベント大島あおぞら市初開催 P4	芸術祭の会場となっている島の住民同士の交流を行う「島間交流」で、大島のみなさんが豊島を訪問 ※モ5	こえび隊の大島ガイド始まる	芸術祭開幕 ※モ4 カフェ・シヨルオープン	実行委員会主催、定例検討会が開かれる ※モ3	大島青松園が瀬戸内国際芸術祭実行委員会に加わる



こえび ※モ6

大島が開いて行くための第2のステップ。作品鑑賞パスポートを持っていないお客さんも、他の島と同じように鑑賞料を払って作品鑑賞できるように。入所者のみなさんはすぐに理解を示してくださいました。



こえび ※モ5

島キッチンで豊島のみなさんと一緒に料理を食べ、アート作品を鑑賞。産業廃棄物問題と闘ってきた豊島、ハンセン病問題を抱えてきた大島。いろいろなことを乗り越えてきたみなさんの温かな交流が行われました。



交流会では、食事を楽しみ、歌の出しものもあり、とても盛り上がりました



P6
入所者さん、大島ファンのお客さんやこえび隊が大集合！



P5
入所者さんから直接お話を聞いた貴重な回もありました



P4
みなさんの輝く笑顔が忘れられない素敵なイベントでした

編集後記

瀬戸内国際芸術祭の構想が生まれてから16年、こえび隊が大島に通り始めてから11年が経ちました。大島レターの発行も5年目10号となり、回を重ねるごとに本誌が届くのを楽しみに待ってくださる方が増えていること、読者が折に触れ私たちに感想やメッセージを寄せてくださること、本当に心強く思っています。

「この子らが、どういう視点や角度で誰にインタビュして話を引き出していくのか、興味があるんですよ。」大島アワーを始める時、故山本隆久さんがおっしゃった言葉です。私たちの大島への姿勢を問われていると思わず背筋を直しました。今でも壁にぶち当たった時、山本さんの期待を裏切らないようにしないと！と私たちを奮い立たせてくれます。大島の活動が多くの方に支えられていることに感謝し、今に甘んじることなくさらに深化させなければと自省する日々です。

大島レター 10 2021年3月31日 発行 高松市
編集協力 国立療養所大島青松園、大島青松園入所者自治会
編集 集 こえび隊(笹川尚子、甘利彩子、北川フラム)
問い合わせ NPO法人瀬戸内こえびネットワーク 〒760-0019 香川県高松市サンポート1-1
TEL 087-813-1741 FAX 087-813-1742 info@koebi.jp www.koebi.jp